

# 扁桃に異常 手足に膿疱

両手のひらと両足の裏に点々と小さな白い水ぶくれ。8年前の冬のある日、埼玉県朝霞市の主婦A子さん(45)は小さな異変に気付いた。しばらくすると、水ぶくれは手のひらと足裏の全体に広がり、慌てて近くの皮膚科に駆け込んだ。

診断は「掌蹠膿疱症」。一般には聞き慣れない病名だが、皮膚科では比較的よく見られるという。手のひらや足裏に水ぶくれ(膿疱)とかさぶたが繰り返してできる。40〜50歳代の喫煙者に多い。

「治りにくいので諦めてください」。医師からそう言われ衝撃を受けたA子さん。大病院に移ったが、今度は飲むのに一苦労するほど多くの薬を処方された。しかし、水ぶくれ

れは指先にも広がり、痛むので毎夜、ステロイドの塗り薬をつけた後、指一本一本にガーゼを巻いて寝た。治療に専念するため実家に戻ったが、病状は一向に改善せず、諦めかけていた。そんな時にインターネットで、この病気の治療に実績がある聖母病院(東京都新宿区)皮膚科部長の小林実さんを知った。

また病院を変えることためらいもあったが、「専門で診てくれる所がいい」という母(71)の後押しもあり転院を決めた。2010年5月の初診時、これまでの経過を話すと、小林さんは熱心に耳を傾けた。「この先生なら治してくれる」。Aさんは確信した。

4か月後、手のひらは良くなったが、爪と足裏は変わらなかった。そこで小林さんは扁桃の摘出を提案した。小林さんによると、扁桃を摘出した患者の8割に改善が見られるという。Aさんは抵抗感もあったが、小林さんを信頼して決断。それでも手術後の出血の多さと痛さに驚いた。だが、効果は徐々に表れ、7か月後には、症状が残っていた爪と足裏もきれいに治った。「治療中は見た目を気にして外出が嫌で、気分が沈むこともありました。治ってからは好きな旅行にも出かけられるようになりました」と喜ぶ。



扁桃摘出前のAさんの爪(小林さん提供)



今はマニキュアを塗れるようになったAさんの爪

小林さんは掌蹠膿疱症は主に、病原体に対する防御機能を持つ扁桃が、ストレスなどをきっかけに口の中に潜む細菌に異常な反応を起こして起きると考えている。小林さんは指摘する。「医者も患者も根本の原因を探って対処しなければ、この病気は治らない」(このシリーズは全6回)



# 扁桃摘出し関節痛解消

「病気の原因は思わぬ所に隠れているんですね」。

関節炎で一時は歩けなくなるほど苦しんだ埼玉県越谷市のB子さん(54)は、痛みから解放された今も不思議な思いでいる。効果があつたのは、意外にも扁桃を摘出する治療だった。

B子さんが異常を感じ始めたのは約10年前。まずかかどが刺すように痛んだ。すぐに治まるので放置していたが、痛みは肩や肘、膝などにも広がり、強さも増していった。

地元の整形外科にかかるのと、関節炎と診断された。炎症を抑える注射で痛みは一時的に消えるものの、また痛み出すという繰り返しだった。寝汗がひどくなり、微熱や体のだるさも現れた。

それが1年ほど続いたある日、39度近い高熱が出て右脚全体の腫れと腰痛で動



は曲がるとき右脚がひどい痛みを訴えたB子さん

思った別の医師がステロイド剤を点滴してみたところ、劇的に効いた。

詳しい検査のため、順天堂大学病院(東京都文京区)を紹介され、「扁桃炎に伴う反応性関節炎」の診断が

けなくなった。近くの病院に緊急入院し、感染性関節炎と診断された。

抗菌薬の点滴を受けたが、痛みが続いていることを訴えても、担当の医師は「効いているはず」ととり

あつてくれない。しかし、熱が下がらないのを疑問に

たと思っていた2014年秋頃、再び右脚が腫れた。同病院内科科長の小林茂人さんから「扁桃をとると治ることがあるのでやってみませんか」と提案された。これで良くなるならと決断した。

翌年の2月に手術を受けた後は、徐々に痛みがなくなった。悩まされていた体のだるさもなくなり、日頃の体温も以前より低くなった。手術の3か月後、小林さんに軽快したことを報告したのが通院の最後になった。「今、これまでの人生で一番体調が良いです」

反応性関節炎の詳しい発症の仕組みはまだわかっていないが、体の免疫機能が関係していると考えられている。

小林さんは「関節リウマチなどと診断された人の中に、反応性関節炎の患者がいる可能性もある。関節の痛みが起こり始めた際、繰り返し扁桃炎を起こしているかどうかが診断のカギになる」と話している。



# 扁桃と歯周炎から腎症

「少し回り道をしたけれど、適切な治療にたどりつきました」。中学校で軟式テニス部に入り、ラケットを振る三男、C君(12)の姿に母のD子さん(49)は目を細める。

C君は5歳の時に「IGA腎症」を発症した。IGAは、外から侵入する病原体を排除する抗体の一種。それが腎臓の濾過機能を担う毛細血管「糸球体」に沈着する。抗体は本来、体を守るものだが、何らかの異常で自らを攻撃するよう

になり、血管の壁に炎症を起こして、血尿やたんぱく尿の症状が出る。放置すると腎不全になる恐れもある。

最初の異常は、発熱と耳の下の痛みだった。おたふく風邪かと思っていたが、かかりつけの小児科医に「血尿があるので詳しい検査を受けてください」と仙台市内の病院を紹介された。そこでは詳しい原因がわからず、東北大学病院に移り、腎臓の組織を調べてようやく診断がついた。

ステロイドや免疫抑制剤などで症状は安定したが、1年たち薬を減らすと、再び血尿が表れた。ステロイドで顔が丸くなり、眼圧が高くなる副作用もあった。

「このまま治療を続けさせられない」。D子さんは専門家を訪ね歩き、仙台赤十字病院小児科主任部長の永野千代子さんに行き着いた。

大人の場合、扁桃を摘出後、ステロイドを大量投与する治療法が定着している。永野さんはこれを子どもにも応用し、発展させた。まず歯を治療し、のどの両側にある口蓋扁桃と鼻の奥とのどが合流する咽頭扁桃(アデノイド)を摘出してステロイドを投与する。

永野さんは、これら3か所の扁桃がIGAを作る司令塔で、歯周炎は扁桃の働きを活性化させる引き金と考えている。

C君も小3の冬、歯周炎の治療を受けた後、扁桃を摘出し、ステロイドを投与。手術後に麻酔が切れると「泣き叫ぶほど痛かった」(C君)が、血尿はびたりと治まった。4か月後、風邪をひいて再び血尿が出た。アデノイドがあった上咽頭の炎症が原因とみられ、炎症を抑える治療で改善した。

IGA腎症の治療で扁桃摘出と上咽頭炎の治療を同時にやっている大久保病院(東京都新宿区)腎臓内科部長の若井幸子さんは、上咽頭の治療も扁桃摘出と同じ効果があると考えている。

腎臓の傷んだ部分は修復できない。永野さんと若井さんは「早期に病気の根本を治療して食い止めることが欠かせない」と口をそろえる。

D子さんは「九州から仙台に治療に来てはいる子もいた。この治療法が広がり、どこでも受けられるようになってほしい」と願う。



軟式テニスのラケットを振るC君。扁桃摘出などの治療で元気になった



# 上咽頭の炎症 頭痛の原因

鼻の奥とのどが合流する上咽頭。ここに慢性的な炎症があると体の様々な不調や病気になることがわかってきた。

大阪市の事務職員E子さん(25)は中学2年生の頃から頻繁に起きる頭痛に悩まされてきた。季節の変わり目や天候で気圧が変化したり、エアコンで室温が上下したりすると、症状が悪化し、ひどいと吐き気も催した。痛みがなくても、常に頭が重い状態が続く。市販の鎮痛薬を服用していたが、効果はなかった。

我慢するしかない諦めかけていた4年ほど前、慢性上咽頭炎の治療で頭痛が改善することを口コミで知った。ただし、この治療は一次的にのどに激しい痛みを伴う。受けるかどうか迷ったが、「長年悩まされている頭痛から解放されるなら」と踏み切った。



田中さんから上咽頭の治療を受けるE子さん



この治療をてがける田中耳鼻咽喉科(大阪市福島区)

を受診。治療は、鼻から入れた内視鏡で炎症を確認しながら、薄い塩化亜鉛溶液を染みこませた綿棒を上咽頭にこすりつけ、炎症を沈静化させる。重い患者ほど治療時の出血と痛みが激しいとされる。E子さんものどに激痛を感じ、綿棒も赤く染まった。だが、治療後、不思議とあれだけ悩まされてきた頭痛が「すっきりした」。

は確認されていたものの、メカニズムがはっきりしなかったため廃れた。21世紀に入って仕組みが解明されつつあり、再び脚光を浴びている。

院長の田中亜矢樹さんによると、上咽頭は、元々、咽頭扁桃(アデノイド)というリンパ組織がある場所。外部の病原体から体を守り、子どもの免疫機能で重要な役割を果たす。成人になると縮小する。

当初は2、3週間に1度、治療を続け、上咽頭の出血と痛みも軽減。今は年に数回、頭痛が起きそうな時に治療を受けるだけで済んでいる。E子さんは「もっと早くに受けていればよかった」と笑顔で語る。

この治療は、「上咽頭療法(EAT)」と呼ばれ、1960〜80年代にかけて体の不調が治るとして盛んに行われていた。効果

しかし、成人でもウイルスや細菌を体内に取り込むと、上咽頭で、外敵を排除しようとする免疫機能が活発になり、炎症が起きる。激しい炎症は発熱やのどの痛みを伴うが、炎症が慢性化し、くすぶり続ける場合は、自覚症状がないまま免疫機能の異常が続き、頭痛や肩こりなどにつながっていると考えられるという。

田中さんは「脳外科や神経内科の専門医に重篤な病気でないと判断されているなら、EATを試す価値はある」と話している。



# 歯周病治し糖尿病改善

松山市で工務店を営む山口隆見さん(77)は、4年前まで重い糖尿病に悩まされていた。6・5%以上が糖尿病の診断目安となるHbA1cの値は11%。「体がだるくて仕事も現場で指示を出すだけでした」と振り返る。

糖尿病と診断されたのは約20年前。しかし、「仕事が忙しいから」と治療を放置しがちな状態が10年以上続いた。そんな時、当時、愛媛大学病院にいた西田互さん(現にじだわたる糖尿病内科院長)に出会った。

「かみ合わせが悪くて歯が痛い」。山口さんの訴えを耳にした西田さんは「信頼できる歯医者さんがいるので診てもらってください。糖尿病も良くなりますよ」とすすめた。

「なんで歯が糖尿病に係するんだらう」。山口さ



原瀬さんの治療を受ける山口さん。今では定期的に診てもらっている

効果は早くも2

か月後に表れた。

HbA1cは8%

に低下。それまで

1日4回していた

インスリン注射は

1回に減った。原

瀬さんの指導で、

食後の歯磨きも習慣になっ

た。今年5月には6・6%

まで下がり、西田さんから

「運動とかしてる？」と驚

かれるほど。山口さんは「体

が軽くなって仕事への意欲

も高まり、現場に出て機械

を動かしたくなるんです

よ」と笑う。

西田さんが糖尿病と歯周

病との関連に着目したのは

10年前に診たある入院患者

茎からの出血で枕が赤くなると聞き、歯科治療を受けてもらった。1か月後、HbA1cが約3%低下した。当時、西田さん自身も不規則な生活から肥満気味の糖尿病予備軍。歯周病もあった。試しに歯科治療を受けてみたところ、体調不良が解消された。

糖尿病と歯周病の関連について、歯茎で起きた炎症から有害物質が血管内に放出され、ブドウ糖を分解するインスリンの機能を妨害するのではないかと考えられている。日本糖尿病学会や日本歯周病学会の治療指針でも糖尿病患者への歯周病治療の推奨が盛り込まれている。

だが、こうした事情は、浸透しているとはいいがたい。西田さんは「歯科医が糖尿病患者と知らずにインプラント(人工歯根)治療などを行い、傷口から細菌が入って症状を悪化させてしまう恐れもある。医師と歯科医の連携を強化すべきだ」と訴えている。

んは半信半疑だったが、市内の原瀬歯科医院を受診した。日頃から歯磨きはおろそかで、朝飯は、みそ汁をかけたご飯をかきこむと、すぐに現場に向かうのが常。歯周病で一部の歯は根元の部分が化膿していた。

院長の原瀬忠広さんは、患部を切開して抗菌薬を注入。歯と歯茎の隙間を掃除し、古いかぶせ物も交換、かみ合わせを調整した。





# 扁桃摘出 効果期待できる

## Q&A

のどや口の炎症が様々な症状の原因になることがわかってきた。旭川医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科教授の原淵保明さんに聞いた。

—どんな病気ですか。

「扁桃炎や歯周炎などによって腎臓や骨・関節、皮膚の病気が引き起こされるもので、『病巣疾患』と呼ばれています」

—発症の仕組みを教えてください。

「口の中には常に様々な細菌（常在菌）が存在し、外部の病原菌の侵入を防ぐ役割を担っています。この常在菌に本来、外敵を排除する免疫反応は働かないのですが、免疫反応が出てしまつて人がいます。その結果、臓器を傷つける抗体やリンパ球などが放出され、血流のついでに腎臓や骨・関節、

旭川医科大学  
耳鼻咽喉科・<sup>とうけい</sup>頭頸部外科教授  
原淵保明さん



1982年旭川医科大学卒業。98年から現職。日本口腔（こうくう）・咽頭科学会理事。2013年に設立された日本病巣疾患研究会の顧問を務める。

皮膚などを傷めます」

—反応のきっかけは。

「ストレスなどから免疫機能のバランスが崩れたり、風邪や喫煙、歯周炎が引き金になったりします。はっきりとしたきっかけがないことも多いです」

—誰でもなりますか。

「遺伝的になりやすい人がいることが明らかになりつつありますが、詳しいことはわかっていません」

手術でしょうか。

—扁桃摘出はどのような手術でしょうか。

「全身麻酔をかけて行い、

時間は30分〜1時間、入院は1週間〜10日程度です。

扁桃は子どもの免疫機能で重要な役割を果たしていますが、3歳を過ぎると体のほかの場所で免疫機能をつかさどるリンパ組織が整うため、3歳以降は摘出して

も免疫機能が低下するといった影響はありません」

—ステロイド薬や新薬などと比べたメリットは。

「ステロイド薬の長期使用は顔のむくみや骨粗しょう症、糖尿病につながる恐れがあります。最近、効果的な生物学的製剤が開発されていますが、副作用の心配があり、大変高価です。扁桃摘出の手術は比較的体の負担が少なく、1回の治療で効くこともあります」

—上咽頭も注目されています。

ある場所で、免疫機能を担っています。扁桃を摘出して上咽頭が病巣となって腎臓などが再び傷つくことがまれにあります」

「以前から慢性の上咽頭の炎症が色々な体の不調につながる事が知られていましたが、治療は手探りでした。現在は鼻から内視鏡を入れて観察しながらピンポイントで治療できるようになっていきます」

—病巣疾患の治療の現状と今後は。

「扁桃摘出の効果について、すべての医師が把握しているわけではないため、医療機関を転々としていたり治療を諦めたりしている患者がいます。ただし、IgA腎症では最近、扁桃摘出とステロイドの投与を組み合わせた治療の有効性が証明され広がっています。扁桃で何が起き、体にどう影響しているのか、証明する研究も盛んになっています」

（原隆也）

（次は「いのちの値段 地域をつなぐ」です）